

エリ阿斯・カネッティとギルガメシュ叙事詩

樋 口 恵

Abstract

Elias Canetti (1905–1994) war ein sephardisch-jüdischer Schriftsteller und Denker deutscher Sprache. Angesichts des Aufstiegs der Nazis stellte er fest, dass „die Macht sich aus der Masse speist“. Nach dem Anschluss Österreichs an das nationalsozialistische Deutsche Reich emigrierte Canetti nach England, wo er anfangs Massenphänomene und Erscheinungsformen der Macht zu erforschen. Im Jahr 1960 erschien die Frucht jahrzehntelanger Arbeit in Form der „Masse und Macht“. Neben ethnologischen Quellen wurden in diesem Buch zahlreiche Mythen behandelt. Canetti liebte Mythen und hatte enormen Respekt vor diesen. Unter anderem spielte der Gilgamesch-Mythos eine besonders wichtige Rolle für Canetti. Das aus dem babylonischen Raum stammende Gilgamesch-Epos, ist das älteste überlieferte Epos. Das Epos schildert die Heldentaten des Halbgottes Gilgamesch, seine Freundschaft zu Enkidu und seine Suche nach der Unsterblichkeit. Mit 17 Jahren begegnete Canetti dem Gilgamesch-Epos und schrieb „buchstäblich keines hat mein Leben so entscheidend bestimmt wie dieses Epos“.

In diesem Beitrag wird geklärt, woher Canettis Faszination für dieses Epos stammt und welche Bedeutungen es für ihn hatte. Erstens prägte das Epos das Lebensziel Canettis, den „Kampf gegen den Tod“. Gilgamesch fürchtet keinen „Ehrentod“, als er mit Enkidu gegen das wilde Ungeheuer Humbaba kämpft und es besiegt, jedoch fängt er an, Angst vor dem Tod zu haben, nachdem Enkidu stirbt. Kurz nach dem ersten Weltkrieg hörte Canetti zum ersten Mal das Epos. Im Krieg wurde der „Ehrentod“ beschworen und es wurden zehntausenden Soldaten in die Schlachten geschickt. Canetti erhobte gegen diesen „Ehrentod“ Einspruch. Der Widerstand Gilgameschs gegen den Ehrentod bestärkte Canettis Überzeugung.

Zweitens symbolisierte das Epos für Canetti das Unbekannte. Das Epos entstand zwar 4000 v. Chr. aber wurde erst in der Mitte des 19. Jahrhunderts entdeckt, demzufolge blieb es der europäischen Literatur und Geistesgeschichte fremd. Canetti zeigte sich verwundert über den Reichtum an „Verwandlungen“ in diesen Mythen und dass diese „das Corpus der überlieferten Dinge, die uns zur Nahrung dienen“ repräsentieren.

Ein weiterer Einfluss des Gilgamesch-Epos spiegelt sich in Canettis Schreibstil selbst. In „Masse und Macht“ zitierte Canetti zahlreiche Mythen und dessen Beschreibungswiese erinnerte selbst an einen Mythos, weil er als Schriftsteller an die Kraft der Mythen glaubte.

Schlüsselwörter: Elias Canetti, das Gilgamesch-Epos

はじめに

エリアス・カネッティ（1905-1994）は、二つの大戦を擁する激動の二十世紀を生きたスペイン系ユダヤ人の作家・思想家である。幼少期にヨーロッパ各地を転々としたカネッティは、母語の古スペイン語に加えて、英語、フランス語、ドイツ語を習得したが、著作活動はすべてドイツ語で行った。カネッティは、1930年代、ウィーンでナチスの興隆を目の当たりにした。

私にはまさにこの現代心理学が全く不十分なように思われるのです。それは個人をテーマにして研究しており、その領域においては確かにいくつかの発見をもたらしましたが、全く何も手を付けることができないのが群衆です。これこそ最も重要であり、人が知らなければならないことなのですが。というのも、今日生まれつつあるあらゆる新しい権力は、意識的に群衆から栄養を与えられているからです。政治的権力を目指している者なら誰でも、いかに群衆を操作すべきかということを実践的に知っています。[Canetti (1985): 41/51f.]

これは、1932年、ナチスが政権を獲得する直前のカネッティの言葉である。ヒトラーは大衆の支持を集め、勢力を拡大させていた。群衆について知ることは、カネッティにとってそれを利用して権力を拡大させる権力者を理解することであり、それはこの時代、何よりも切迫した課題だった。カネッティは、群衆現象を解明することを自らの生涯の使命とし、「水晶の夜」の後、1938年にロンドンに亡命してからは、群衆と権力の相互の研究に本格的に

取り掛かった。そして1960年、『群衆と権力』*Masse und Macht* (1960) にその研究の成果が結実する。この文化哲学的書の目的は、ファシズムを「ただ単にその時代の現象としてではなく、その最も深い起源と最も広範な枝分かれにおいて理解する」[Canetti (1972a): 98/150] ことにあった。『群衆と権力』においては、時代も地域も異なる実に様々な資料が論考の題材にされているが、その中でもカネッティが好んだモチーフは、世界各国の民族の神話や伝承、儀礼である。カネッティは神話に果てしない尊敬を抱き、神話を心から愛していた。1965年に行われたホルスト・ピーネクとの対話において、カネッティは以下のように語っている。

私は何よりも好んで神話を読みます。私の書庫のもっとも重要な部分はその種の書物から成っており、300冊はあるかもしれません。[Canetti (1972a): 96f./145f.]

カネッティは、この対話の他にも、自伝や断想の中で繰り返し神話に対する情熱を語っている。数々の神話の中でもカネッティが最も重要視していたものの一つが「ギルガメシュ神話」である。

「ギルガメシュ神話」は古代メソポタミアに存在した神話であり、半神半人のギルガメシュの英雄譚は四千年ほど前に叙事詩としてまとめられた。『ギルガメシュ叙事詩』*Das Gilgamesch-Epos* は世界最古の長編叙事詩である。この叙事詩においては、ギルガメシュとその友人エンキドゥの友情、二人の冒険、そしてエンキドゥの死を契機としたギルガメシュによる不死の探求がテーマとされている。

カネッティが『ギルガメシュ叙事詩』に出会ったのは、17歳の時である。カネッティはフランクフルトで、俳優カール・エーベルトによるこの英雄譚の朗読を聞いた¹⁾。これはカネッティにとって「最初の神話体験」となった。カネッティは自伝『耳の中の炬火』*Fackel im Ohr* (1980) において、この叙事詩に受けた衝撃を以下のように語っている。

この叙事詩は私の人生とその最も内的な意義に、私の信念と力と期待に、この世の他のいかなるものもなし得ぬような決定的な影響を与えた。ギルガメシュの友人エンキドゥの死を嘆き悲しむ言葉は私の肺腑をついた。(中略) それから死に抗する彼の企て、天上の山の暗中のさすらい、死の海の横断、ノアの洪水を逃れて神々から父子をさずかった彼の遠祖ウトナピシュティムとの出会いが続く。彼はウトナピシュティムからいかにして永遠の生に達すべきか聞き知ろうとする。ギルガメシュが挫折して自分自身も死ぬことは間違いない。しかし、そのために彼の企てが不可欠なものだという思いはなおさら強まるのである。[Canetti (1980): 51f./62]

『ギルガメシュ叙事詩』がカネッティに与えた「決定的な影響」とは、友人の死を嘆き悲しみ、「死に抗する」ギルガメシュの姿勢である。「死との闘い」(Kampf gegen den Tod)は群衆、権力、「変身」などと並んでカネッティの思想の中核をなす概念であり、カネッティは、晩年にいたるまで、あらゆる断想や評論、講演の中で「死に抗する」発言を繰り返している。このことから、この叙事詩はカネッティにとって、不死の追求という文脈において重要な意味を持ったのだと考えられてきた。例えば、カネッティの伝記を著したスヴェン・ハヌシェクは、「友の死を悼むギルガメシュの嘆き、これに続く永遠の生を求める旅は、カネッティがのちに抱く死への敵意を植え付けたとは言えないまでも強化し、それに具体的表現を与えることになった」[Hanuschek (2005): 82/(上)95]としている。しかし「不死の探求」は文学においてたびたび扱われてきた主題である。なぜ他の文学作品ではなく、この叙事詩がカネッティにとってそれほどまでに「決定的な影響」を与えたのだろうか。これまでそのことに関して詳述した先行研究は、筆者の知る限り存在しない。

本論考では、カネッティが『ギルガメシュ叙事詩』について言及している二つのテキスト——自伝『耳の中の炬火』(1980)と、1976年にミュンヘン大学で行われた講演「詩人の使命」——を讀解し、カネッティの神話に対する態度を明らかにすることによって、なぜこの叙事詩がカネッティの「死との闘い」にそれほどまでの決定的な影響を与えたのかを明らかにする。また、「死との闘い」の他にも、ギルガメシュ神話がカネッティにとってなんらかの意味をもっていたのかを検討する。

1. 死との闘い

論考に入る前に、この叙事詩の概要を述べる必要があるだろう。『ギルガメシュ叙事詩』の主人公であるギルガメシュは、半神半人の力強い英雄であると同時に、都城ウルクの暴君としてウルクの人々から恐れられていた。ギルガメシュの傍若無人さを見かねた天神アヌは、創造女神アルルに命じ、ギルガメシュに匹敵するような力の持ち主、野人エンキドゥを創らせる。エンキドゥは荒野で獣たちと一緒に暮らしていたが、ギルガメシュに遣わされた聖娼シャムハトと交わることで人間らしい心と知恵を得る。シャムハトはエンキドゥをウルクに連れ帰る。エンキドゥとギルガメシュは取っ組み合いの格闘をした後、固い友情で結ばれる。ある日ギルガメシュは、エンキドゥに、二人で遙か彼方の杉の森に向かい、恐ろしい森番フンババを討伐することを提案する。エンキドゥはギルガメシュにフンババの恐ろしさを語り、彼の計画を阻止しようとするが、結局は永遠の名を求めるギルガメシュの熱意に負け、遠征に出立することとなる。二人は難儀を重ねて杉の森にたどり着き、フンババを討伐して、ウルクに帰還する。愛と悦楽の女神イシュタルはギルガメシュの雄姿に魅せられて彼

に求婚するが、ギルガメシュは女神のこれまでの不実を並べ立て、彼女の求婚を無碍に断る。激昂したイシュタルは、天神アヌに、天の牛をウルクに送ってギルメシュとその都城を滅ぼすことを求める。アヌは渋々天の牛をウルクに送り、都城に住む数百の戦士が天の牛の前に倒れたが、ギルガメシュとエンキドゥは力を合わせて天の牛を倒す。しかし、フンババと天の牛を殺害したかどで、エンキドゥは神々から死の宣告を受ける。十二日間の病の後にエンキドゥは息を引き取り、ギルガメシュは悲しみに打ちひしがれる。エンキドゥの死を目の当たりにして死の恐怖に襲われたギルガメシュは、古都シュルツパクの聖王ウトナピシュティム唯一人が不死を得たと聞き、彼を訪ねて死生の秘密を知るために旅に出る。ギルガメシュは道中のマーシュの山で蠍人間に出会って山を越える道を聞き出し、宝石や果樹で輝く海辺の地では酌婦シドゥリからウトナピシュティムのもとに行くためには死の湖を渡らなければならないことを教わる。船頭ウルシャナビの助けを借りて死の湖を渡り、ついにウトナピシュティムのもとに辿り着いたギルガメシュは、永遠の生命の秘密を尋ねる。ウトナピシュティムはギルガメシュの熱意に負けて、自分が不死を得て神々に列せられるに至った経緯を語る。神々が人間を滅ぼすために地上に大洪水を引き起こしたが、その際ウトナピシュティムは知恵の神エアに命じられて方舟を作り、危険から逃れることができたこと、その後、神々が彼に永遠の命を授けたことである。しかし、ウトナピシュティムはギルガメシュに、今日のはもはや神々が人間に永遠の命を与えることはないと話す。ギルガメシュは悲嘆にくれるが、これを気の毒に思った妻に諭されて、ウトナピシュティムはギルガメシュに「若返りの草」の在処を知らせる。この草を手に入れたギルガメシュは嬉々としてウルクへの帰途につくが、道中の泉で身を清めている間に、蛇にこの草を食べられてしまう。ギルガメシュは結局、永遠の命を手に入れることなくウルクに帰還する。以上が『ギルガメシュ叙事詩』の概要である。

この叙事詩は大きく分けて二つの冒険から構成される。一つはギルガメシュとエンキドゥがフンババ征伐へと向かう旅であり、もう一つはギルガメシュがエンキドゥの死後に不死を求めてウトナピシュティムを訪ねに行く旅である。この二つの冒険に旅立つギルガメシュの死に対する態度は全く異なっている。

ギルガメシュがフンババ征伐へ向かうことを決めた際、エンキドゥは、胸騒ぎのする夢を見たので、悪いことがあるに違いないと考え、ギルガメシュを引き留めようとする〔矢島(1998): 53〕。これに対してギルガメシュはあくまで遠征に出かけると主張し、エンキドゥに向って次のように語る。

だれが、わが友よ、天〔上〕まで上ることができようか
太陽のもとに永遠に〔生きるは〕神々のみ

人間というものは、その（生きる）日数に限りがある
彼らのなすことは、すべて風にすぎない
お前はここでさえ死を恐れている
お前の英雄たる力強きはどうしてしまったのだ
私をお前より先に行かせてくれ
お前の口に呼ばわせよ、『進め、恐れるな』と
私が倒れれば、私は名をあげるのだ
『ギルガメシュは恐ろしきフンババとの戦いにやぶれたのだ』と
我が家の子孫ののちのちまでも〔矢島(1998): 58〕

死を恐れるエンキドゥに対して、ギルガメシュは、人間の生には限りがあること、フンババとの戦いで倒れれば後世に名を残すことができることを説いている。つまり、ギルガメシュはこの時点で、「名誉の死」(Ehrentod)を望んでおり、死を恐れていなかったのである。

前述のように、カネッティは「死との闘い」を作家としての使命であると標榜していた。しかしカネッティの「死に抗する」発言は、首尾一貫した論証にまとめられておらず、その真意ははっきりとしない²⁾。カネッティの死に関する一連の発言に関してはこれまで様々な研究がなされてきたが、その中でもゲラルト・シュティークは、カネッティの死への敵意に、歴史的背景を見ている。第一次世界大戦では「名誉の死」がうたわれ、何万という兵士が戦場に送られていった。そして、1939年、第二次世界大戦が勃発し、再び「名誉の死」が必要とされることとなった。カネッティはこの名誉の死を疑問視していたというのである〔Stieg (1988): 99〕。戦争において、人々は「死ななければならない」という道徳的価値のもと、自分を犠牲にする。カネッティはこうしたモラルの錯覚を暴こうとしているのである〔Stieg (1988): 99〕。シュティークの論に従うならば、ギルガメシュはまさに「名誉の死」を否定する存在として、カネッティの目に映ったのではないだろうか。ギルガメシュは名誉のためならば死をも恐れなかったが、友人エンキドゥの死を通して、死を恐れるようになった。このギルガメシュの変化こそが、カネッティにとって意味をもっていたのではないだろうか。カネッティが『ギルガメシュ叙事詩』の朗読を初めて聞いたのは1922年から1923年の夏頃のことであり、第一次世界大戦の傷も癒えない頃であった。死を恐れるという一般的な英雄像からかけ離れたギルガメシュという英雄の姿³⁾は、「名誉の死」を正当化する世の中に否というカネッティの姿勢に合致した。カネッティにとって、ギルガメシュは時代に求められた英雄像を覆す存在だったのである⁴⁾。

2. 変身の源泉

「変身」(Verwandlung)はカネッティの術語であり、『群衆と権力』や断想、講演にも度々登場する。しかし、この変身という概念は変遷を重ねている。カネッティは1943年に書かれた断想の中で、人間は統一的存在ではなく、様々なものを内包しており、それら多くのものに変化する能力を具えている述べている [Canetti (1972b): 68]。ここではまだ変身という言葉が登場していないが、自分の中に他者を有するという変身の概念の萌芽がみられる。『群衆と権力』の中では、先の断想で語られた「自分の中に他者を有する」という性質に「変身」という名前が与えられている。カネッティは、変身の能力を「人間に多くの権力を与えてきたもの」、「人間のうちにある最も良いもの」とし、種々の観点からこの概念にアプローチしている。しかし、カネッティは「変身の本質を解明することははなはだ困難である」[Canetti (1960): 397/(下)93]とし、「変身」の明確な定義を行っていない。ところが『群衆と権力』の出版から9年後に書かれたエッセイ『もう一つの審判 カフカの「フェリーツェへの手紙」』*Der andere Prozeß. Kafkas Briefe an Felice* (1969)では、変身は権力を回避するためのものだと定義している [Canetti (1969): 96f./134-135]。1976年にミュンヘン大学で行われた講演「詩人の使命」*Der Beruf des Dichters* においては、カネッティは「変身」は共感や感情移入と呼ばれてきたもの、他者を理解するためのものであるとする [Canetti (1976): 367]。そして、詩人の使命とは、「変身の番人」として「人類の文学的財産、すなわち変身が豊かであるという文学的財産を習得すること」[Canetti (1976): 364]、ヨーロッパ諸国による植民地化によって失われた未開民族の精神的遺産を「真に保持し、私たちの生活に復活させること」[Canetti (1976): 366]だと述べている。そして、変身を禁じる専門化・分業に反対し、専門化は自己破壊をもたらし、変身という人間の特徴を窒息させるものだと批判している [Canetti (1976): 263]。この講演「詩人の使命」において、カネッティは『ギルガメシュ叙事詩』について以下のように語っている。

この叙事詩は、荒野で獣たちとともに暮らしていた野人エンキドゥの都会人、文明人への変身によって始まる。狼のもとで暮らしていた子供たちの具体的で詳細な話を知っている今日の我々にとって、関係のあるテーマである。彼の友ギルガメシュはエンキドゥに死なれ、死との途方もない対決をすることになる。それは自己欺瞞という苦い後味を残しながら現代の人間から解放されている対決である。ここで私はほとんど信じがたい出来事の日撃者としての自分を眼前にする。四千年前に成立し、百年前までは誰にも知られていなかったこの叙事詩ほどに、私の人生に決定的な役割を果たした作品は文字通り他にない。17歳の時に私はその叙事詩に出会ったが、以来それは私を捉えて離さない

かった。私は聖書に立ち返るかのようその叙事詩に立ち返った。その特有の効果を除けば、その叙事詩は私たちにとって未知のものがあるのだという期待で私を満たした。我々の糧となるような伝承された物事のコーパスを完結したものと見なすことは私にとって不可能であり、仮にそのような重要な意味を持った文字に残された作品がもうないことが明らかになったとしても、自然民族による口承文学の夥しい蓄えが残されている。なにしろそこには我々が問題としている変身が際限なく存在しているのである。
[Canetti (1976): 365f.]

カネッティは、獣たちと暮らしていた野人エンキドゥが聖娼シャムハトと交わることによって人間の知恵を得て文明人となるエピソードを、「変身」と捉えている。『ギルガメシュ叙事詩』における「変身」について言えば、引用の最初の「野人エンキドゥの都会人、文明人への変身」という箇所以外には、この講演の中にエンキドゥの変身について言及した箇所はない。この一文からだけでは『ギルガメシュ叙事詩』に見出される変身が、カネッティの変身概念に与えた影響は判然としない。「変身」というテーマのこの講演の文脈に沿って、エンキドゥの変身に一言触れたにすぎないとも思えるほどであり、むしろこの講演においてもギルガメシュの死との対決に力点が置かれている。

それでは『群衆と権力』においてはどうか。『群衆と権力』には、「変身」という章があり、カネッティは様々な自然民族の神話や世界文学を論拠に「変身」について論考しているが、その際『ギルガメシュ叙事詩』には一言も触れていない。一方で、『ギルガメシュ叙事詩』と並んで英雄物語と称される『オデュッセイア』は、『群衆と権力』において、「逃走変身」⁵⁾の例として論考における重要な役割を担っている。また、「詩人の使命」の先の引用部の直前で、カネッティは『オデュッセイア』における「変身」について詳述している。『オデュッセイア』と『ギルガメシュ叙事詩』の違いはどこにあるのだろうか。

『ギルガメシュ叙事詩』は紀元前1800年頃にバビロン文化で文字にされ、紀元前1250年頃に叙事詩の形になったものであるが、この叙事詩が発見されたのはようやく19世紀半ばになってからのことだった。イギリスの発掘調査隊によってアッシリア語版のギルガメシュ叙事詩が記された粘土板がメソポタミアで発掘されると、その後各国の学者たちによって各書版が発見され、19世紀末から徐々にこの叙事詩の全貌が明らかになっていった。古バビロニア語版、シュメール語版などの各国版のテキストがまとめられ、ほぼ現在の形となったのは、1930年刊行のカムベル・トムソンの版である [矢島 (1998): 139-148]。つまり、この叙事詩は『オデュッセイア』と並ぶ世界文学であるにもかかわらず、カネッティが先の引用で述べているように、「百年前までは誰にも知られていなかった」のである。カロリーネ・ホルニクはカネッティの神話に対するイメージにおいて「なじみのなさ」が重要な意味を持つ

ていることを指摘している [Hornik (2006): 93]。『オデュッセイア』は伝統的にヨーロッパの文学や精神史の中にあっただが、『ギルガメシュ叙事詩』は発見されたのが19世紀になってからということもあり、ヨーロッパの文明史外にとどまっていた。そのために、カネッティは『オデュッセイア』を世界文学とみなしているのに対し、『ギルガメシュ叙事詩』を神話と見なしていたというのである [Hornik (2006): 93]。

カネッティは先の引用の後半部分で、変身を内包する（文字に書かれた）文学作品をもはや見つけることができなくなったとしても、「自然民族の口承文学」の中には豊かな変身が残されていると述べている。『ギルガメシュ叙事詩』のような「未知のもの」、「我々の糧となるような伝承された物事のコーパス」がまだ存在していること、神話や自然民族による口承文学が「変身」の源泉として残されていることへの期待が記されているのである。

以上のことから、『ギルガメシュ叙事詩』がカネッティの変身の概念に何か直接的な影響を与えたというよりはむしろ、この叙事詩を通して神話に出会えたこと、そして神話が内包する「変身」の豊さに気づけたことにおいて、この叙事詩はカネッティにとって重要な意味を持っていたのではないかと考えられる。『群衆と権力』において、カネッティは無数の神話、口承文学を論考のモチーフとしているが、『ギルガメシュ神話』はそれらの題材へとカネッティを向かわせる原動力となったのである。

3. 神話の力

『群衆と権力』の「変身」の章において、カネッティが『ギルガメシュ神話』について一言も言及していないことは既に述べたが、この章以外のどこにも、この叙事詩は登場しない。無数の神話や民俗学的資料が用いられている『群衆と権力』において、『ギルガメシュ叙事詩』はまったく論考の対象になっていないのである。これはなぜだろうか。

一つには、『ギルガメシュ叙事詩』が「群衆」や「権力」といった『群衆と権力』の主要なテーマについて論じる際の論拠として適していなかったことが考えられる。例えば、第二章で述べたように、『ギルガメシュ叙事詩』はカネッティの「変身」の概念自体には大きな影響を与えていないため、「変身」の章ではギルガメシュについて触れられていなかった。第一章では『ギルガメシュ叙事詩』がカネッティの「死との闘い」という思想に影響を与えたこと、特に「名誉の死」を重んじる世の中の風潮に対するアンチテーゼとして、死を恐れる英雄ギルガメシュの態度にカネッティが共感したのではないかと論じた。しかし、死というテーマは『群衆と権力』においてほとんど扱われていないため、この叙事詩を持ち出す必要がなかったのかもしれない。

カネッティが『群衆と権力』において『ギルガメシュ神話』に言及していない理由は、も

う一つ考えられる。それは、カネッティの論考の方法論に関わるものである。

カネッティがイギリス亡命時代に最も親しく交流していたのが、民俗学者で抒情詩人のフランツ・ベアマン・シュタイナーであったが、カネッティはシュタイナーを純粋な神話の崇拜者として尊敬し、称賛していた。カネッティは『雷光の中のパーティー』でシュタイナーを以下のように描写している。

彼は神話について話すことのできた、私が知る限り唯一の人物だった。(中略) 彼は神話に手を付けることもなければ、それを解釈することも、それを学問の原則に従って秩序づけようと試みることもなかった。彼は神話をただそっとしておいた。神話は彼にとって決して単なる手段にならなかった。[Canetti (2005b): 128]

神話を「学問の原則に従って秩序づけ」ること、「単なる手段」とすることは、カネッティにとって、例えばレヴィ=ストロースの構造主義やフロイトの精神分析を意味する。

レヴィ=ストロースと神話。神話は効力を失うように切断され、再編成される。この神話の破壊の過程が神話研究とみなされている。いったいどうして何千もの神話を飲み込んだ人間が、神話がシステムの「反対」なのだということを知らずにおれようか。[Canetti (2004): 427]

これは1993年に書かれた断想の一節である。カネッティは神話をシステムと正反対のものであると捉え、レヴィ=ストロースの神話研究の方法を否定的に見ている。また、フロイトのエディプス・コンプレックスに関しては、オイディプスの運命の途方もなきを奪う「神話の減少」であるとしている⁶⁾[Canetti (1980): 117/154]。

私は神話の力をこのままにしておきたい。科学的抽象によってそれを弱めたくない。[Canetti (2005a): 320]

カネッティにとって、神話を解釈し、学問の原則に従ってシステムチックに秩序づけようとすることは、神話の持つ力を減少させることに他ならない。全ての現象を一つの概念でもって説明するということは、その現象に対する解釈をある決まった型にはめることとなるからであり、それは神話の持つ多様な豊かさとは正反対のものだからである。カネッティは、人間が単一の存在ではなく、様々な素質からなる多様な存在、「変身」する存在であると考え、「詩人の使命」では、専門化・分業が人間の変身という特質を窒息させるものだとこれ

に反発していた。職業に限らず、一つの学問にとどまることも、カネッティにとっては「変身」を妨げることとなるのである。『群衆と権力』において、カネッティは適宜、神話に僅かな注釈を与えるものの、複数の神話を比較してそこから一つの理論を導き出そうと試みることはしていない。カネッティは神話に心理学的、社会学的、あるいは哲学的な解釈を与えるのではなく、神話に含まれた「変身」や、群衆、権力者の姿をそのまま資料として提示するという叙述形式をとっている。ハヌシェクは『群衆と権力』が、民俗学的資料を語りなおした「物語」であるとしているし [Hanuschek (2005): 444/(下)134]、エアハルト・シュットウペルツは『群衆と権力』を、「文化人類学的小説」と称している [Schüttpelz (2008): 293]。エドガー・ピールは、カネッティの作品全体において、創作されたものと実在するもの、事実と非事実との間に明確な線引きがされていないことを指摘したうえで、カネッティは、「研究者」というよりは、「作家」であると述べている [Piel (1988): 60]。そして、すべての物事を主観的基礎によって知覚しようとするカネッティの『群衆と権力』を、一つの「神話」として定義しようとする [Piel (1988): 60]。カネッティは現実とフィクションを区別することなく、「神話」として群衆と権力の現象を提示しようとしたというのである。セルジュ・モスコヴィシもまた、カネッティが『群衆と権力』において、「デュルケーム、ウェーバー、フロイトが存在しなかったかのように、新しい神話を、古い神話や宗教という基礎に基づいて作り出そうと」 [Moscovici (1988): 66] したとし、『群衆と権力』を神話と捉えている。

カネッティは『群衆と権力』において、神話をありのままに読者に示した。あるいは神話を新しい神話として語りなおした。それは、システム化され、「自己目的」化 [Canetti (1972b): 36] した学問に対する反発であると同時に⁷⁾、神話が内包する真理、神話の持つ力を、私たちに学問としてではなく、神話そのものとして伝えたかったからではないだろうか。カネッティが『群衆と権力』において『ギルガメシュ叙事詩』に言及していないのは、この叙事詩が論旨に即していなかったためと考える。しかしまた、神話の持つ力を教えてくれたこの叙事詩を、その効力を弱めないために、「ただそっと」しておきたかったからなのかもしれない。

おわりに

カネッティが17歳の時に出会った『ギルガメシュ叙事詩』は、この作家に「死との闘い」を決意させた。また、神話における「変身」の豊かさ、神話の持つ力に目を見開かせてくれた。カネッティを神話、口承文学へと向かわせるきっかけとなった。

カネッティにとっての神話は、時代を超越した人間の真理を内包するものだった。それゆ

え、主著『群衆と権力』においても、神話は好んで論考の題材とされたし、神話的な叙述形式がとられた。『ギルガメシュ叙事詩』はカネッティと神話とを繋ぐ結節点だったのである。

注

- 1) カネッティは「詩人の使命」において、『ギルガメシュ叙事詩』に出会ったのは17歳の時だったと語っている。そのため、カール・エーベルトによるこの朗読は1922年から1923年の夏頃に行われたものであり、おそらく1921年に翻訳された Arthur Ungnad 版のものであったと考えられる。『群衆と権力』には参考文献として Arthur Ungnad 版の『ギルガメシュ神話』が挙げられている。また、チューリヒ中央図書館が作成しているカネッティの蔵書目録にもこの本がある。
- 2) カネッティにとって「死に抗すること」が「権力に抗すること」につながるという先行研究が多い。拙著『エリアス・カネッティ「群衆と権力の軌跡」——群衆論の系譜と戯曲集を手がかりに』第四章に詳しい。
- 3) 例えば、神話学者のジョーゼフ・キャンベルは、『千の顔を持つ英雄』の中で、「当然のことながら、死を少しでも恐れる者は英雄になれないだろう。英雄の第一条件は、墓との和合である」と述べている [キャンベル (1949): 244]。
- 4) 『ギルガメシュ叙事詩』のテーマは本来、不死の追求や死に抗することだけではない。死を受容し、死を受け入れた上で自らの生を生きることがこの叙事詩のテーマだと一般的に理解されている。しかし、カネッティは「死の受容」というこの叙事詩の側面を無視している。
- 5) カネッティによれば、敵から逃れるための変身は、一般的なものであり、世界中の神話やおとぎ話に見られる [Canetti (1960): 403/(下)101]。『オデュッセイア』ではプロテウスがメネラオスから逃れるためにライオン、蛇、豹、猪、水、樹木に変身する [Canetti (1960): 406/(下)105]。
- 6) カネッティはフロイトの精神分析に一貫して反発しているが、両者の論考方法には共通点も多い。例えば、文学作品と精神分析とを並列して文学作品を自説の裏づけとすること、民族学的資料と精神病学の短い性格描写を関連付けることによる論考方法である。両者の理論にも非常に似通っているところがあり、カネッティがフロイトから影響を受けていたことは明らかである。なぜカネッティがフロイトを批判し、避けていたのかは上記の拙著第五章を参照されたい。
- 7) カネッティの「反学問」・「反科学」の態度についても同じく、上記の拙著第五章で詳しく論考している。

文献

引用箇所の出典は、[] 内に著者名を記し、その直後の () 内に原書の初版の出版年を示した。コロンの後に原著の頁を、邦訳のあるものについてはスラッシュの後に翻訳書の該当頁を記した。邦訳のみを用いた場合は、著者名をカタカナで示した。

Canetti, Elias (1960): *Masse und Macht*. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1960, 2011. (『群衆と権力

- (上)』岩田行一訳，法政大学出版局，1971年。『群衆と権力（下）』岩田行一訳，法政大学出版局，1971年)
- (1969): *Der andere Prozeß. Kafkas Briefe an Felice*. München (Carl Hanser Verlag) 1969. (邦訳『もう一つの審判 カフカの「フェリーツェへの手紙」』小松太郎・竹内豊治訳，法政大学出版局，1971年初版，1990年3刷)
- (1972): *Die gespaltene Zukunft*. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1972. (『断ち切られた未来—評論と対話』岩田行一訳，法政大学出版局，1974年) [Canetti (1972a):] と表記する。
- (1972): *Aufzeichnungen 1942-1985. Die Provinz des Menschen. Das Geheimherz der Uhr*, München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1972, 1987, 1993. [Canetti (1972b):] と表記する。
- (1976): *Der Beruf des Dichters*. In: Ders.: *Das Gewissen der Worte*. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1967, 1975, 1995. S. 360–371.
- (1980): *Die Fackel im Ohr. Lebensgeschichte 1921–1931*. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1980, 1993. (『耳の中の炬火—伝記1921–1931』岩田行一訳，法政大学出版局，1985年)
- (1985): *Das Augenspiel. Lebensgeschichte 1931–1937*. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1985, 1994. (『目の戯れ—伝記1931–1937』岩田行一訳，法政大学出版局，1999年)
- (2004): *Aufzeichnungen 1954-1993. Die Fliegenpein. Nachträge aus Hampstead. Postum veröffentlichte Aufzeichnungen*, München/Wien (Carl Hanser Verlag) 2004.
- (2005): *Aufsätze - Reden - Gespräche*. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 2005. [Canetti (2005a):] と表記する。
- (2005): *Party im Blitz. Die englischen Jahre*. Aus dem Nachlaßherausgegeben von Kristian Wachinger. Frankfurt am Main (Fischer Verlag) 2005. [Canetti (2005b):] と表記する。
- Hanuschek, Sven: *Elias Canetti*. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 2005. (『エリアス・カネッティ伝記』(上)(下)北島玲子・黒田晴之・穴戸節太郎・須藤温子・古谷晋一訳，上智大学出版，2013年)
- Hornik, Karoline: *Mythoman und Menschenfresser. Zum Mythos in Elias Canettis Dichterbild*. Bielefeld (Aisthesis Verlag) 2006.
- Moscovici, Serge: *Ist die Idee der Masse noch aktuell?* In: Pattilo-Hess, John (Hg.): *Canettis Masse und Macht oder die Aufgabe des gegenwärtigen Denkens*. Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1988. S. 66–73.
- Piel, Edgar: „Im Gehäuse der Hörigkeit lässt sich nicht leben. Canettis ‚Masse und Macht‘: Wissenschaft oder Mythos?“. In: Patillo-Hess, John (Hg.): *Canettis Masse und Macht oder die Aufgabe des gegenwärtigen Denkens*. Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1988. S. 52–65.
- Schüttpelz, Erhard: *Elias Canettis Primitivismus*. Aus der Provinz der Weltliteratur. In: Lüdemann, Susanne (Hg.): *Der Überlebende und sein Doppel, Kulturwissenschaftliche Analysen zum Werk Elias Canetti*, Freiburg (Rombach Verlag) 2008. S. 287–309.
- Stieg, Gerald: „Masse und Macht“ – Das Werk eines „Verwilderten Gelehrten“? In: Pattilo-Hess, John (Hg.): *Canettis Masse und Macht oder die Aufgabe des gegenwärtigen Denkens*. Wien (Österreichischer Bundesverlag) 1988. S. 95–102.
- ジョーゼフ・キャンベル『新訳版 千の顔を持つ英雄』上下(倉田真木/斎藤静代/関根光宏訳，

- 早川書房, 2015年) (原著: Joseph Campbell: *The Hero with a Thousand Faces*. 1949, 1968.)
矢島文夫訳『ギルガメシュ叙事詩』(ちくま学芸文庫, 1998年)
渡辺和子「ギルガメシュの異界への旅と帰還—「英雄」と「死」—」東洋英和女学院大学死生学研
究所編『死生学年報2005 親しい者の死』リトン, 2011年, 135-164頁。